



中野五丁目津波避難タワー

2015年2月、仙台市東部の津波浸水区域に、鉄骨2階建ての津波避難タワーが完成しました。地上6.6メートルの高さに設けた屋内避難スペースも含め、約300 人が避難可能で、防寒・停電対策のほか、非常食・飲料水・毛布・簡易トイレ などの備蓄や車椅子用のスロープを設置するなど、東日本大震災の教訓を踏まえ た仙台独自の工夫がされています。

この施設は、地域住民の緊急時の避難場所として活用されるほか、国内外の防 災関係者の視察受入を行うなど、世界の防災・減災にも貢献しています。

住 所 仙台市宮城野区中野5丁目2番(仙台港後背地3号公園内) 構造 鉄骨造(2階建)屋外階段、スロープ付

延べ面積 398㎡ 収容人数 約300人

高 さ 2階部分避難スペース 6.6m、最上階避難スペース 9.9m

問合せ先 仙台市危機管理室防災計画課

TEL 022-214-3047 E-mail kks000120@city.sendai.jp

お知らせ

● 「世界防災フォーラム / IDRC 2017 in Sendai」の開催が決定!

ダボス (スイス) で1年おきに開催される国際会議「国際災害・リスク会議」(IDRC) にて、同会議が来年 11月に仙台で開催されることが発表されました。

仙台での会議は、「World BOSAI Forum (世界防災フォーラム) / IDRC 2017 in Sendai」 の名称で、東 北大学、仙台市が中心になって開催。国内外の防災関係者が集い、国連防災世界会議で採択された 「仙台防災枠組 2015-2030」の推進について、国際レベルで議論します。

8月31日に行われた IDRC 閉会式では、東北大学災害科学国際研究所の小野裕一教授や、仙台市の伊藤 敬幹副市長も出席し、「来年は、仙台の復興と防災・減災に向けた様々な取り組みを直接ご覧いただくとと もに、仙台・東北の魅力を体験してほしい」と仙台会議への参加を呼びかけました。



▲ IDRC主催者のウォルター・アマン氏(中央) を挟んで、左: 小野教授 右: 伊藤副市長

「ともに考える防災の未来一私たちの仙台防災枠組」講座シリーズ

●第2回 「優先行動とステークホルダーの役割 | を開催しました

9月3日に開催した第2回講座では、東北大学災害科学国際研究所の村尾修教授とボレー・ペンメレン・ セバスチャン助教より、国連防災世界会議で採択された仙台防災枠組の特色の一つ「災害に対する十分 な備えとより良い復興」の考え方や、多様な主体が防災や復興に関わることの重要性などについて、説明

その後、参加者が各自記入した「仙台防災枠組・優先行動チェックシート」を用いたグループディスカッションで、 活発な意見が交わされました。最後にボレー助教から、「日本のように防災対策が進んでいる国は他にあ りません。世界に誇れる『仙台防災枠組』を、ぜひ広めてください」と呼びかけました。



▲「優先行動」についての講義を行う村尾教授

今後の「仙台防災枠組」講座シリーズ開催予定

※各回個別の参加も可能です。

●第3回「国際間・市民間での協力とパートナーシップ」

日 時 12月10日(土) 14:00~16:00

会場 東北大学災害科学国際研究所1階多目的ホール

講 師 東北大学災害科学国際研究所

小野 裕一教授、マリ・エリザベス・アン助教

講座シリーズへのお問い合わせ・お申し込みは 下記の仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室に ご連絡ください。

●特別講座「大人も子どもも ともに学ぼう仙台防災枠組」

日 時 2017年1月21日(土) 12:30~16:30(予定)

会場 東北大学片平さくらホール

講 師 東北大学災害科学国際研究所 今村 文彦所長、保田 真理助手

●最終ワークショップ

「仙台防災未来フォーラム2017」で発表しよう!

日 時 2017年2月開催予定

2017年3月開催予定の「仙台防災未来フォーラム 2017」での発表に向けて、 これまで学んだことをまとめます。

発 行 仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室

〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1

T E L: 022-214-8098 F A X: 022-214-8497

E-mail: mac001605@city.sendai.jp

編集株式会社仙台紙工印刷

発行日 2016年11月

▶「えーる」は防災環境都市・仙台ホームページにも掲載しています。 http://sendai-resilience.jp

仙台市の取り組みから、 市民の方々の取り組みまで、より詳しく紹介しております。

▶次号は1月発行予定です。



この印刷物は「再生紙」を使用しています。

タブレットでも!



震災の経験と教訓を世界へ。

防災に関心を持ったきっかけは、大学2年生の 時に東日本大震災が起き、大学の人文地理学 のゼミで津波被災地の被害状況や被災者の聞 き取り調査などを行ったことです。その後、一 般財団法人日本国際協力センター(JICE)の「キ ズナ強化プロジェクト」に参加し、モンゴルを 訪問する中で、海外の人々の災害や防災に対 する意識の低さを痛感しました。それがきっかけ となり独立行政法人国際協力機構(JICA) が実 施する青年海外協力隊事業に応募、大学卒業後 の2014年7月から2年間、中米ジャマイカで、防 災や災害対策の指導を行ってきました。

派遣されたカリブ海に面しているジャマイカ西 端のウエストモアランド教区(行政区画)は、 100年以上大きな地震がないこともあって、住 民の方々に災害に対する危機感がほとんど無 く、どうしたら防災意識を持ってもらえるか、 本当に悩みました。

そこでまずは子どもたちに災害や防災について 知ってもらおうと考え、小・中学校の生徒たち に、震災の映像や写真を見せながら自分の体 験を話し、一緒に町なかの危険な場所を探して 歩き防災マップを作成しました。ゼロからの立 ち上げで苦労しましたが、最後に防災ポスター コンクールを行うと、子どもたちの絵には非常 食や懐中電灯などの災害への備えや地震発生 時の対応などが具体的に描かれており、活動の 成果を感じてとてもうれしかったです。子どもか ら家族へ、そして地域へと、この防災意識が広 がっていくことを願っています。

日本では当たり前の災害や防災の知識も、ほ とんど知らない方が海外にはたくさんいます。 仙台の防災や減災に対する取り組みは、世界 でも活用できる大変有益なものです。皆さんも ぜひ防災について学び、それを多くの人に伝え て欲しいと思います。



▲ジャマイカでの自然災害についての授業の様子



▲ジャマイカの子どもたちが描いた防災ポスタ-

青年海外協力隊

ODA (政府開発援助) の一環として、開発途上国からの要請に基づき、必要な技術・知識・経験を持つボランティアを派遣する事業。(実施主体:独立行政法人国際協力 機構 (JICA))。活動分野は農林水産、保健衛生、教育文化、スポーツ、計画・行政など。2016年7月末現在までに88ヵ国へ計41,700名の隊員が派遣されている。 TEL 03-5226-9813 E-mail jicavolunteer-boshu@jica.go.jp ホームページ http://www.jica.go.jp/volunteer/index.html



忘れてはならない、津波の経験と教訓。

―― 震災時の津波被害はどのようなものでしたか。

松岡 南蒲生地区は3メートルを越える津波でほとんどの家屋が浸水 または流出して、当町内会だけでも17名の方が亡くなりました。 私は車で自宅へ帰る途中で、ラジオから流れる津波のニュースを 信じられない気持ちで聞いていました。産業道路から先は、車を 降りて腰まで水に浸かりながら自宅へ向かいましたが、駐在所 の警官に止められ、諦めざるを得ませんでした。幸い家族が、無 事に避難していることがわかり、指定避難所である岡田小学校 に行きました。周囲の方に話を聞くと、津波警報を聞いて小学 校に避難するとすぐに校庭まで津波が押し寄せ、慌てて校舎の 屋上へ駆け上って難を逃れたということでした。

桜井 私はこの津波で自宅が流され、娘婿を亡くしました。家族を助け なければと、自宅に戻ろうとしたのですね。本当に悔やんでも悔 やみきれない。無念でなりません。あの時、がれきを巻き込んだ 津波が凄まじい勢いで七北田川を遡り、たくさんの家や人を押 し流していきました。私自身も仕事で、中野小学校の辺りをタク シーで走っており、携帯電話で娘と孫に「とにかく高い所へ逃げ ろ」と伝えた後、津波のがれきにぶつかり、血だらけになりなが らも九死に一生を得ました。海岸近くで大きな地震を感じたら、 自分一人でも高いところへ逃げる、そして何があっても絶対に戻 らないことです。



▲ 岡田<mark>小学校の屋上に避難する町内会の皆さん (津波避難訓練)</mark>

未来へ伝える、地域ぐるみの防災活動。

―― 毎年「津波防災訓練」をされているのですね。

松岡 今年の訓練には120人の住民が参加しました。岡田小学校に 新たに完成した屋外津波避難階段を屋上まで全員が駆け上が り、班ごとに人数の確認・点呼を行いました。消火訓練や怪我 の応急処置の講習なども行いました。

11月5日の仙台市全体の津波避難訓練では、岡田地区7町内 会合同訓練も実施する予定です。

桜井 地域の若いご夫婦や小さな子どもたちも多数参加しています。 町内会の婦人防火クラブでは50名が活動しており、女性の仙 台市地域防災リーダー(SBL)も活躍しています。こうした活動 を他の地域にも広め、次の世代へと受け継がなければなりま せん。自分の身を守る「自助」はもちろん、地域の人たちと助 け合う「共助」も重要です。隣近所の人にも声をかけあえる関 係を、日頃から築いて欲しいですね。

津波防災、復興への取り組みを世界へ。

――復興と防災についてメッセージをお願いします。

松岡 震災の翌年から、地域の若い人たちが中心となって「南蒲生復興 部」を立ち上げ、自然豊かな環境と調和するまちづくりを進めていま す。蒲生から藤塚の沿岸部では、かさ上げ道路をはじめ海岸防潮 堤や河川堤防の整備が進んでいます。ビルド・バック・ベター(より 良い復興)と言うそうですが、震災前よりももっと良いまちにしてい こうと、行政や企業などと一体となって復興に取り組んでいます。

私は南蒲生町内会の防災部長を務めるとともに、語り 部タクシーのドライバーとして視察に訪れる方々を被災 地に案内し、津波の恐ろしさや教訓、また復興の歩み などを伝える活動もしています。震災の経験と教訓を語 り継ぎ、国内外の皆さんと共有していくことも、私たちの 大きな責務だと思います。

11月5日は、「世界津波の日」ですね。11月にインドで 行われる「アジア防災閣僚級会合」にも、仙台市から 代表の方が参加されると聞いています。

> 世界各地でさまざまな災害が発生しています。幾多の 災害を克服してきた先人たちの叡智、そして震災の経 験と教訓を国内外の方に伝え、共有し、防災や減災に 役立てていただく事は、大きな意義のあることだと確信 しています。私たちの震災の経験と教訓、そして防災の 取り組みが世界の皆様と共有され、役立つことを心か ら願っています。



▲ 避難人数の確認・点呼を行う様子 (津波避難訓練)

南蒲生町内会

鎌倉時代から農業集落としての歴史を持つ地域にあり、昭和10年代頃から自治組織として発足。東日本大震災時は約3月210元の津波が襲来して大きな被害を 受けたが、現在は住民主導の防災活動や地域の環境を活かした復興まちづくりに取り組んでいる。ホームページ http://minamil-gamou.com/

なみよう!

東北大学災害科学国際研究所から

世界に発信する、津波研究と防災教育

東北大学災害科学国際研究所

災害リスク研究部門津波工学研究分野 准教授 サッパシー アナワット氏

(タイ出身・1983 年生)



東北大学災害科学国際研究所 (IRIDeS) で、津波工学の研 究をしています。バンコクのチュラロンコーン大学在学中に、 2004年のスマトラ沖大地震によるインド洋津波の被害を目 の当たりにし、タイにおける津波や防災対策の必要性を強く 感じ、2007年10月から、今村文彦教授(現IRIDeS所長)の 研究室で津波防災の研究を始めました。IRIDeSは、東日本 大震災後に設立された、自然災害科学に関する世界最先端

の国際研究拠点です。震災の経験と教訓を踏まえながら、巨大災害に対する「実践的防災学」 を体系化・具体化し、国内外の防災・減災に貢献することが使命です。

津波工学研究は、海岸工学や地質学、防災学など多岐にわたりますが、私の研究内容は、簡 単に言えば、東日本大震災から得られた膨大なデータを元に、巨大津波による構造物などへ の被害を解析・モデル化し、危険性を評価するものです。これらの評価や津波数値モデルを 活用して、南海トラフ、インド洋、ペルシア湾など、国内外の津波災害リスクを推計し、ハザー ドマップや津波避難モデルを提案するほか、予想される津波の高さなどを基に建物の被害を 予想できる津波防災アプリの開発も始めました。

また、防災教育にも力を入れており、バンコクやプーケットなどの小・中学校で出前授業を行って います。私も出身校などで授業をしました。タイの教育省に紹介した、仙台の小・中学校の 防災教育副読本「3.11から未来へ」を参考に、タイの先生方が教材を作成しています。こうし た活動を通して、タイと日本の防災の架け橋となり、世界中の子どもたちにも、災害に備え ることの重要性を伝えていきたいと考えています。

仙台は、東日本大震災という未曽有の災害を経験した唯一の100万人規模の都市です。この 地で「実践的防災学」に関する世界最先端の研究を行うことは、震災・復興の情報を直接入 手できるとともに、実際に防災に携わっている地域の人々と接することができるという大きな メリットがあります。来年11月「世界防災フォーラム」が仙台で開催されることが決定し、ます ます仙台そしてIRIDeSが世界の防災に果たす役割も大きくなります。11月5日は、「世界津波 の日」です。この機会に、市民の皆様もぜひ、震災や津波のことを、家庭で、そして職場や学 校で振り返り、もう一度災害への備えを見直していただけたらと思います。





▲ 防災教育副読本 「3.11 から未来へ」 (仙台市教育委員会作成)

東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS イリディス)

022-752-2011 ホームページ http://irides.tohoku.ac.jp/

海外の子どもたちも 見ているんだね!



世界津波の日(11月5日)

津波の脅威を啓発し、対策を推進するため、2015年12月に国連総会で11月5日を 「世界津波の日」に制定することが決定されました。日本をはじめ142か国が共同提案国 となっていたもので、安政元年(1854年)11月5日に和歌山県で起きた大津波の際に、村 の濱口梧陵という男性が自らの収穫した稲むらに火をつけることでいち早く危険を知ら せ、避難させたことにより村民の命を救った「稲むらの火」の逸話に由来しています。 日本でも、広く津波対策についての理解と関心を深めることを目的として、毎年11月5日 を「津波防災の日」と定め、全国で様々な普及・啓発活動が行われています。



